

日本語版に寄せて

白石は韓国ペンの高校教科書『国語』『文学』に最も多くの詩が掲載されている詩人である。彼の詩集『鹿』は、韓国の現役詩人を対象にしたアンケートで、「我々の時代の詩人に最も大きな影響を及ぼした作品」に選ばれたこともある。白石を扱った書籍や論文はこれまでに一千編を上回る。これだけみても、白石の詩と人生に対する学会や文壇、そして読者の関心が並々ならぬものであることを窺い知ることができる。

日本が朝鮮を併合した直後の一九一二年に生まれた白石は、一九四五年の光復クワンボク（解放）以後、北朝鮮で活動して人生を終えた。白石は、自分の思想的な信念に従って南から北へ移った越北チョクベク詩人ではない。家族のいる北朝鮮でしばらく創作活動をしていたが、結局は社会主義体制に適応できず、平壤ピョンヤンから追われて農作業で晩年を送らざるを得なかった悲運の詩人だ。南北分断以後の数十年間、彼は南と北のどちら側でも文学史的に認められることすらできなかった。しかしいま、韓国の研究者や読者は白石の詩に熱中している。こうした熱狂を白石は予想だにできなかっただろう。

彼は日本で習得したモダニズムを詩の創作技法としながらも、植民地を生きっていく朝鮮民衆の伝統的な生活に詩のレンズを向けた。ネクタイを締め、おしゃれなスーツ姿で光化門クァファムン通りを闊歩するモダンボーイではあったが、故郷の貧しい両親の前ではこのうえなく軟弱な息子だった。白石は日

백석 평전
안도현 (安度眩)

A Critical Biography of Baek Seok
by Ahn Do-Hyun

Copyright © 2014 by Ahn Do-Hyun
Originally published in Korea by Dasan Books Co., Ltd., Gyeonggi-do.
All rights reserved.

Japanese Translation copyright © 2022 by Shinsensha Co., Ltd., Tokyo.
This Japanese edition is published by arrangement with Cuon Inc.

This book is published with the support of
The Literature Translation Institute of Korea (LTI Korea).

Jacket design by KINOSHITA Yu

本統治時代を生き抜きながら、日本語で詠った詩をただの一篇も残さず、むしろ故郷である平安北道ピョンギョクの方言を巧みに活用して詩を書いた。彼は日本に協力する「親日作品チニル」も書かなかった。

韓国の人々が白石に注目し、彼の詩に魅了されるわけは、彼が植民地朝鮮の知識人の中できわめてフランスのとれた人生を送ったからかもしれない。彼は尹東柱ウナドジュとともに、韓国詩の伝統的な流れを形づくる重要な詩人として位置づけられている。その白石の「寄る辺なく気高くさみしい」人生と詩を追い、再現したのが本書〔原題「白石評伝」〕である。

第二次世界大戦以後、韓国と日本、そして北朝鮮との間の歴史的な傷痕は完全には癒えていない。歴史的事実に目を向ける観点に相違があり、問題を解決する方法もそれぞれであって、喉に引っかかった杏あんの仁を飲み込めないでいる状況とよく似ている。このような時期に本書の日本語版が出版されることは実に喜ばしいことだ。私が愛する白石詩人の詩と人生が日本で知られるようになれば、日本で白石を介して東アジアの過去と現在を診断する新しい視点が芽生えるかもしれない。

長い時間をかけ、念入りに事実関係を確認しながら翻訳に骨を折ってくれた五十嵐真希さんの熱い思いに敬意を表し、新泉社のみなさんに感謝の念を捧げたい。新型コロナウイルスの流行で世界中が堅く凍りついているが、私たちの庭に春はきつと訪れるだろう。

二〇二二年二月 韓国にて

アン・ドヒョン

目次

日本語版に寄せて 003

まえかき——白石を書き写していた時間 005

プロローグ

帰郷 016

第一部 詩集『鹿』の誕生まで

平安北道定州郡葛山面益城洞 020

五山学校時代 028

素月と白石 034

青山学院に留学する 044

日本での文学修行 049

『朝鮮日報』との縁 063

光化門通りの三人組 068

ある霧雨の日 074

詩人としての第一歩を踏み出す 081

百部限定の詩集『鹿』 090

『鹿』が文壇に投じた砲弾 095

統営、統営 101

歌って飲んだ晋州の夜 111

第二部 咸興時代

咸興へ旅立つ 118

『鹿』に対する別の見方 126

白石の詩に影響を受けた詩人たち 136

咸興で出会った子夜 142

友人、慎弦重の驚くべき裏切り 150

日中戦争の狭間で 157

僕とナターシャと白いロバ 166

崔貞熙と盧天命と毛允淑、そして鹿 175

軋む咸興時代 182

優れた『女性』誌の編集者 193

画家の鄭玄雄 207

第三部 満州時代

- 満州へ旅立つ 216
北方にて 225
倦怠と幻滅 234
測量も文書も嫌気が差し 243
白きかべがあつて 253
鴨緑江が近い安東の税関で 270
雲隠れした詩人と詩 278

第四部 解放後

- 解放された平壤で 286
三十八度線を越えなかつた理由 295
南新義州柳洞 朴時逢方 302
戦争と翻訳 308
童話詩の発見 314
攻撃的な児童文学論 321
児童文学論争の矢面に立たされる 330
生き残るために 345

- 赤い手紙をいただいて、館坪里の羊を育てる 352
平壤は何も変わっていなかった 365
三池淵スキー場取材記 377
南に送る手紙 389
こうして消えた名前 404
詩人の死 413

註・年譜

- 解説註 418
人名註 436
文献註 460
白石年譜 462

付録 白石詩抄 465

収録作品一覧 483

解説 評伝のかたちで再現した白石の生涯と文学……………李東洵 486
訳者あとがき 495